

第 21 回子どものこころの研修会

日 時：2024 年（令和 6 年）8 月 3 日（土）午後 3 時～5 時

会 場：Zoom ウェビナーによる Web 開催（Live 配信）（会員には後日オンデマンド配信を予定）

講 演「困った行動の背後にある愛着の問題」

兵庫県中央こども家庭センター医療参事

兵庫県立ひょうごこころの医療センター精神科部長

木下直俊 先生

座長 大阪小児科医会プライマリ・ケア部会 竹中義人

◎ 参加費：会員医師 無料（非会員の医師 5,000 円、医師以外 1,000 円）

◎ 日本小児科医会子どもの心の相談医 4 単位

◎ 日本小児科医会地域総合小児医療認定医 5 単位

◎ 日本医師会生涯教育制度 2 単位（申請中）

◎ 大阪府医師会指定学校医制度認定研修会 1 単位取得（申請中）

◎ 子どものこころ専門医機構子どもの専門医 1 単位取得（申請中）

※子どものこころ専門医機構子どもの専門医の受講証明書は Live 配信終了時に申請用 QR コードを表示します。必要な先生はご自身で申請をお願いします。QR コードでの申請が困難な方は大阪小児科医会事務局までご連絡ください。

木下 直俊（きのした なおとし）先生ご略歴

平成7年に大阪大学医学部を卒業。

平成7年6月から平成8年5月 大阪大学附属病院小児科研修医

平成8年6月から平成10年5月 愛染橋病院小児科

その後、大阪大学小児科後期研修医、大阪大学微生物病研究所大学院博士課程卒業の後、平成15年4月から、肥前精神医療センターにて児童精神科医としての研修を開始。

平成23年5月大阪精神医療センター、平成28年4月兵庫県立ひょうごこころの医療センターで、児童精神科の入院、外来治療を担当してきた。

令和4年より、兵庫県中央こども家庭センター医療参事、ひょうごこころの医療センター非常勤医師。

困った行動の背後にある愛着の問題

兵庫県中央こども家庭センター 医療参事 木下直俊

子どもの困った行動の背後に、発達障害があると見立てて、対策をこうじるといった作業は、発達障害の臨床を行っている医師は日常的に行っていると思われる。最近では、子どもの困った行動の背後にトラウマがあると見立てて対応を考えるトラウマインフォームドケアも徐々に理解が広まりつつあるところである。

子どもの困った行動、とくに、万引き、お金の持ち出し、ぬすみぐい、汚れものをため込む、うそを頻繁につくなどが繰り返される場合には、その背後に愛着の問題を見立てることができ、その見立てに沿った対応で状況が改善する場合もある。本講演では、そもそも愛着行動とはどういったものなのか、どういう場合に愛着の問題を見立てることができるのか、愛着の問題があると見立てた場合にどんな対処法が有効なのかについて、私の実践方法を説明する。本抄録ではその要点だけを示す。

愛着行動とは、子どもが3歳ごろまでに示す行動で、ピンチになったときに、特定の養育者にひつつく行動と考える。ひつつくとは、近寄って抱っこをもとめる、泣いて怒って要求するなどの行動である。この際に養育者の受け止めやすさの観点から、スムーズで穏やかな愛着行動と、とげとげして激しすぎる愛着行動とに分けることができる。大人の養育スタイルが、こどもに対して感度よく、こどもの行動に受容的で、こどもの存在に協調的で、こどもから近づきやすいものであるとき、親と子の愛着関係は安定に向かう。

学童期になると愛着行動は、ピンチになったときに、養育者や信頼している年長者に対して発動する。そのスタイルは、相談する、側にいてもらう、かまってもら、アピールして泣く、暴れるなどである。思春期以降になると愛着行動は、ピンチになった時に、養育者や信頼している年長者や親友や恋人や好きなもの（音楽、アニメ、アイドルなど）に対して発動する。そのスタイルは、相談する、側にいてもらう、かまってもら、アピールして泣く、アピールして自傷する、暴れる、好きな音楽を聴く、好きなアイドルの推し活動をするなどである。

愛着の問題は、こどもの側の要因、例えばこどもの発達障害やこどものトラウマ体験で生じる場合もあるし、親の側の要因、例えば親の不安定愛着パターン、親の発達障害、親のその他精神・身体疾患、親の多忙や不在によって生じる場合もある。

問題行動の背後に愛着行動を見立てるのは、問題行動が万引き、お金の持ち出し、ぬすみぐい、汚れものをため込む、うそをよくつくなどである場合、問題行動が特定の子どもにとって甘えやすい環境でのみ起こっている場合（たとえば甘えられる学校の先生のいるところだけで暴力が出現するとか、特定の甘えられる大人の前でだけ自傷するなど）である。

問題行動の背後に愛着行動を見立てた場合には、そのメカニズムを困っている子どもの支援者に説明する。その際に支援者を傷つけないように伝えることがコツである。愛着行動はピンチの時に発動するのだから、今その子どもが陥っているピンチを和らげる支援をまず行う。そして、問題行動になっているのは、とげとげして激しすぎる愛着行動であるから、その問題行動には丁寧ではなく淡々と対応し、それ以外のスムーズで穏やかな愛着行動を引き出して丁寧に受け止めるような促しを、支援者みんなで協力して行うようにする。スムーズで穏やかな愛着行動を引き出すには、定期的にマンツーマンで関わることが大変役立つ。

本講演では上記の内容について具体例を示しながら解説する。